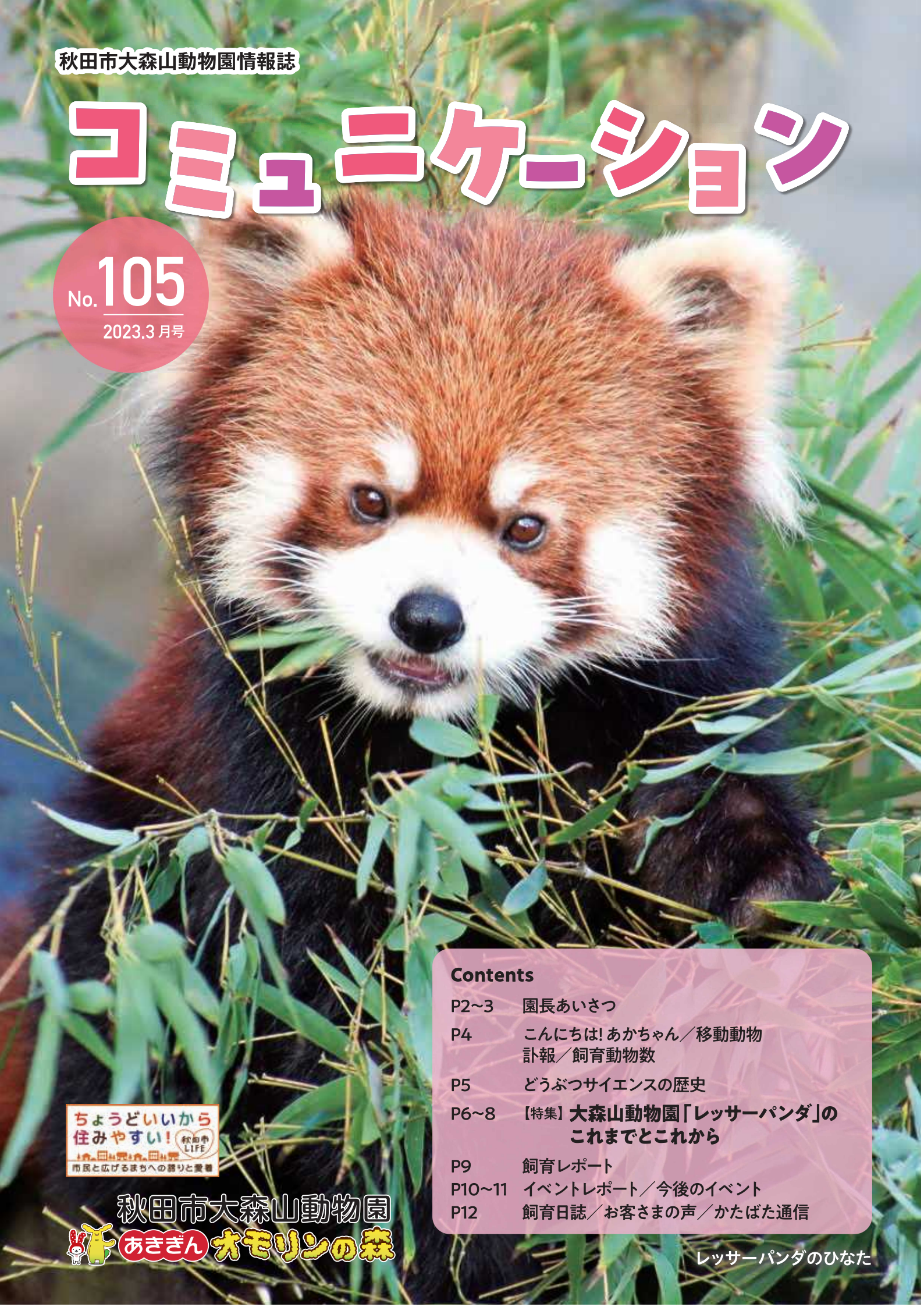
秋田市大森山動物園情報誌

コミュニケーション

No.105
2023.3月号



ちょうどいいから住みやすい！ 秋田市LIFE
市民と広げるまちへの誇りと愛着

秋田市大森山動物園
あきぎん大モリンの森

Contents

P2~3　園長あいさつ
P4　こんにちは! あかちゃん／移動動物訃報／飼育動物数
P5　どうぶつサイエンスの歴史
P6~8　【特集】**大森山動物園「レッサーパンダ」のこれまでとこれから**
P9　飼育レポート
P10~11　イベントレポート／今後のイベント
P12　飼育日誌／お客さまの声／かたばた通信

レッサーパンダのひなた

園長あいさつ

大森山動物園、50年の歩みを振り返り

園　長　小松　守

2023年のシーズンに大森山動物園は開園50周年を迎える。1973年に千秋公園の児童動物園を引き継ぎ、大森山動物園として誕生、成長してきた50年は、1,200万人を超えるご来園の皆様、動物園と様々関わって頂いた方々の思いが詰まった時間とも言える。動物園の歩みを振り返ることは、未来に思いを広げる力にもなるはずだ。限られた紙面だが、48年という長い間、動物園に関わり続けることができた者として、私なりに経営的な視点で50年を俯瞰してみた。

大森山動物園の誕生は秋田の人々の子どもへの思いから誕生している。戦後に制定された都市公園法は全国の公園づくりを促進させた。秋田市は公園づくりのテーマに子どもの豊かな心を育む「こどもの国」を掲げ、1968年に公園構想を発表した。その場に大森山が選定され、公園づくりの核に動物園建設を組み込んだのは、手狭などの課題を抱えた児童動物園があったからだろうし、そうでなければ今の大森山動物園はなかったかもしれない。

1971年10月、市は予算約5億円の動物園建設計画を発表。将来はゾウなども導入したい考えが当時の新聞記事になっている。1973年9月1日、動物園は大森山公園と同時に華々しくオープン、来園者の笑顔だけでなく、同年11月末の冬季閉園までの入園者数が13万人近くだったことは期待の大きさを表している。

開園後もシマウマやカンガルーなどの動物導入を年次的に進め、さらに1981年には今も人気のサル山をオープンさせた。この頃には、中国蘭州市から友好都市提携の記念としてラクダが、サンパウロ秋田県人会からブラジル産のパカが、さらに同会から1988年に再び新世界ザルが贈られた。一方、開園後数年で園は現在の恒例イベントであるサマースクールや写生大会を開始し、動物展示以外でも期待に応えようとしていた。

動物園が充実してゆく中、大森山でのゾウ飼育展示を夢見る市民の声も聞かれるようになった。時は秋田市制100周年が間近の頃で、動物園はこれに合わせ1985～6年頃にゾウとキリンの導入について、用地選定や動物舎設計、飼育の体制強化や動物確保なども検討、新動物園づくりに匹敵する仕事が山積した。市の理解を得て大型

動物導入事業として園内南側山林を切崩し土地造成が始まったのは市制100周年の1989年、そして1991年春に展示が始まった。新動物園建設計画発表から20年が経っていた。この年の入園者数は過去最高の35万人、市民の動物園への注目度が高まる中、1990年に園独自の情報誌「コミュニケーション」が発行された。スタッフも奮い立っていたのだ。

ところで、大型動物導入事業費の約6億円と1973年開園当時の動物園建設費約5億円の単純比較はできないが、ゾウとキリンの導入は実に大事業でもあり、財源の確保のこともあり動物園はこの時に特別会計に移行し、現在に至っている。

こうした勢いは次に動物とのふれあいサービスの充実に向けられ、1997年に「ふれあいランド」ができた。このサービスの充実で動物園と学校等との関わりが深まり、動物園の教育的役割を意識するようになった。この整備完了で動物園の形や運営スタイルが現在とほぼ同じになった。開園から約25年を要したのだ。

開園30周年目前の2002年、動物園を大きく揺さぶり、転機につながってゆく出来事があった。前脚を骨折した子キリンが義足をつけて懸命に生きた「義足のキリン・たいようの物語」である。社会反響も大きく、様々な書籍やTVドキュメント、さらには道徳の教科書にも取り上げられた。いのちと懸命に向きあった大森山動物園の存在意義を多くの人が考えるきっかけになった。翌年の30周年記念式典後、子どもたちが園内で「青空シンポジウム」を開

千秋公園の児童動物園

き、未来の動物園を話し合った。2005年には大森山動物園の役割について、子どもや大人がシンポジウムを開き、そのあり様を考えた。これらは同年の「秋田市大森山動物園条例」の制定に結び付き、翌年1月に施行、「雪の動物園」も正式に開園した。

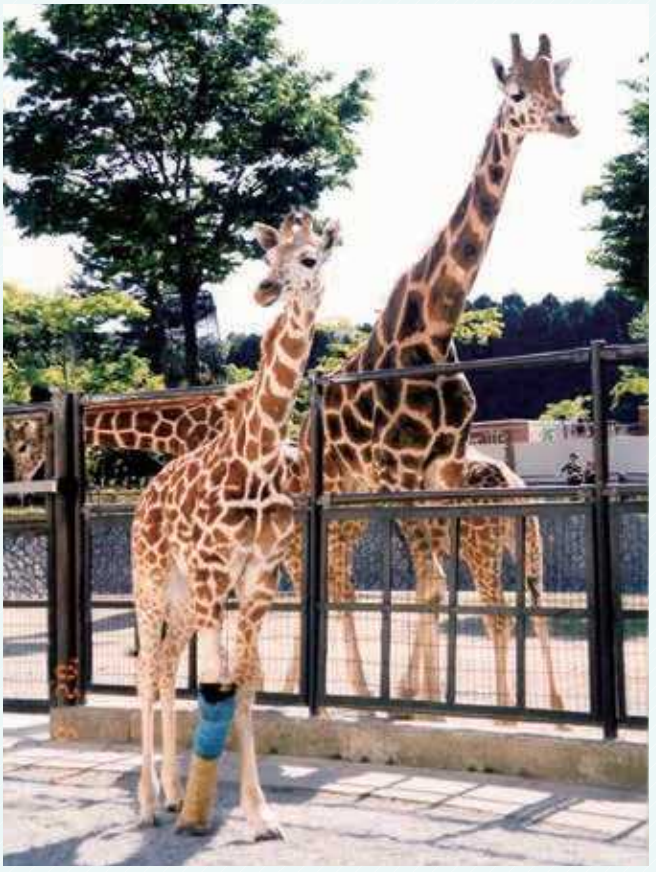
こうした活動は30年が経過し老朽化が始まった園施設の計画的再整備に大きな影響を与えたのかもしれない。2007年の研修室含む新管理事務所「ミルヴェ館」、2008年の動物病院「森のびょういん」、2009年の「アソヴェの森」建設整備へと続いた。2010年頃から公園事業でゲート改修が検討され、2014年にはゲート機能を持ったビジターセンターができ、来園者サービスが大きく改善された。そして2021年には冬でも暖かい室内からガラス越し暮らすサルの見学ができる新サル舎「天空の楽猿（らくえん）」もできた。

整備と並行し2007年に「秋田の動物園を語る」市民シンポジウムが秋田大学と連携し開催され、大森山動物園の将来が話し合われた。2009年には市民参加での動物園の将来を構想する委員会が開かれ、翌年公園と動物園の一体的再整備を描いた「大森山自然動物公園（仮称）整備構想」が示された。見直しを経て2021年には構想は「大森山公園整備基本計画」に格上げされた。大森山公園と融合し発展する動物園づくりが展望されている。

こうした発展は、例えば希少動物の繁殖や動物管理のためのトレーニング開発など動物飼育の実績、「まんまタイム」やエサやり体験などのサービスの充実、園独自の積極的な情報発信など、園活性化に取り組んできた現場力の成長とともにあった。2015年から始まった秋田公立美術大学と連携した「大森山Arts & Zoo（現：アートプロジェクト）」や2016年の秋田銀行によるネーミングライツ・パートナーの導入なども追い風にもなった。

何よりのこの発展を支えたのは、ファンやボランティアなど市民の動物園への思い、市組織全体の理解、そして様々な試練を乗り越えお客様や動物と向き合い続け挑戦してきたスタッフの存在、言い換えるとそれぞれの人たちが「動物園は大切な場だよね」という思いの総和と私は考える。動物園づくりで忘れてはならない大事なことだ。

この50年で動物園を取り巻く社会、経済、自然環境は激変した。不安定で混沌とした時代ほど、人と動物が共に生きることの大事さを感じる動物園の存在は大きくなるだろう。動物園の未来を考える時、この本質も忘れてならない大事なものだ。大森山動物園は、機関誌名「コミュニケーション」やテーマ「動物と語らう森」で人と動物の共生をぶれずに主張してきたつもりである。



たいようと父親のジュン

こんにちは！

あかちゃん

2022年8月以降に大森山動物園で生まれた赤ちゃんをご紹介します。

モルモット

11月に3頭のお母さんから合わせて8頭の赤ちゃんが生まれました。モルモットは生まれたときにはほぼ大人のモルモットと同じ状態で生まれてきます。おっぱいを飲みますが、今回は生まれたその日に草をかじる姿が見られました。みんな、元気に育ってね。

元気でね！

大森山を後にした動物たち

小百合／メス

かんた／オス

レッサーパンダ

2022年11月2日に小百合が札幌市円山動物園へ、11月10日にかんたが鯖江市西山動物園（福井県）へ旅立ちました。レッサーパンダの管理計画に基づく移動です。2頭のこれまでの生い立ちなどについては6ページの特集をご覧ください。

この他、ホオアカトキのオス2羽が福岡市動物園へ移動しました。

よろしくね！

仲間入りした動物たち

円実／メス

レッサーパンダ

2022年11月2日に札幌市円山動物園から、ひなたのお嫁さんとしてやってきました。ひなたよりも2歳年上ですが、仲良くしてくれることを期待しています。詳しくは6ページの特集をご覧ください。

アフリカタテガミヤマアラシ

2022年11月19日に静岡県の富士サファリパークから2頭が来園しました。2022年はオスのおこげだけだったので、これからはにぎやかなヤマアラシファミリーを築いてほしいです。入園ゲートを入ってすぐのウェルカム動物舎でお待ちしています。

キッシュ／メス

トロワ／メス

プレーリードッグ

2022年12月7日に上野動物園から2頭が来園しました。大森山のプレーリードッグ8頭はみんな血縁のある家族なので、新しい家系のプレーリードッグが仲間入りすることで、より多様な群れになります。こちらもウェルカム動物舎でご覧になれます。

ルーク／オス

ポン／メス

忘れないよ…

訃報

チンパンジー

2022年8月22日に11歳で亡くなりました。ルイは2017年に横浜市野毛山動物園からやってきました。ルイのお父さんであるコブヘイが大森山動物園の出身だったからです。まだ幼かったルイは外展示場になかなか慣れることができませんでしたが、仲良しのコタロウと一緒にやっと外に出られるようになり、これからが期待されていた矢先でした。

ルイ／メス

レッサーパンダ

2022年10月30日に9歳で亡くなりました。ゆりは今回転出した小百合と、双子のかんた、ひなたのお母さんです。ケンシンとの間に4頭の子どもを産み、育てました。詳しくは6ページの特集をご覧ください。

ゆり／メス

シロフクロウ

2022年10月13日に23歳で亡くなりました。シロは2000年に多摩動物公園（東京都）からやってきました。真っ白い羽根がとてもきれいで、メスの「ピンク」との間にたくさんの子どもを残しました。

シロ／オス

この他、ニホンザル、アカカンガルー、ジャンボウサギ、コモンマーモセット、ワオキツネザル等が亡くなりました。

飼育動物数

（2022年12月末現在）

哺乳類	49種	342点
鳥類	24種	124点
爬虫類	12種	25点

両生類	3種	5点
魚　類	3種	26点
無脊椎	1種	23点

合計
92種　545点

どうぶつサイエンスの歴史

獣医師　髙橋　拓

どうぶつサイエンスとは

どうぶつサイエンスは、秋田拠点センターアルヴェ内の自然科学学習館と大森山動物園の獣医師との共同企画で毎年実施しています。動物園にいる動物を教材として動物のふしぎを見て、考えて、触って、手を動かして動物に対する興味と命について学習するイベントです。

どうぶつサイエンスの歴史

2005年度冬から始まったどうぶつサイエンスは、2022年まで18年の歴史があります。動物の身体の部位に注目してその特性について学んだり、動物園の獣医師のお仕事を学んだりしてきました。

印象に残っているのは、2011年に２回に渡って開催した「骨からみる命シリーズ」です。この年から「アルヴェとミルヴェ（動物園）の命のコラボレーション」と題して内容が充実していきます。その一つが、今では携帯電話にも搭載しているものもありますが、当時は珍しいハイスピードカメラを使用した教材作りです。スーパースロー動画でよりわかりやすく見せたいという思いで、中古のデジカメを購入して撮影しました。その時は、各動物（人間も含む）の食べ方や歩き方について学び、撮影した動画ではヤギと馬では同じ草を食べさせても食べ方がはっきり違う事が分かりました。

その他、大陸の動物シリーズ、干支の動物シリーズなどリピーターの参加者も楽しめるよう、内容がかぶらないように試行錯誤し実施してきました。

過去のテーマ一覧

年	どうぶつサイエンスⅠ	どうぶつサイエンスⅡ	どうぶつサイエンスⅢ
2005			アルヴェから冬の動物園へGO！（食）
2006	足	消化	羽の不思議にせまる
2007	視力	食べる	毛皮・皮ふ
2008	うむ	どうぶつのお医者さん	
2009	「つかむ」～指のはたらき～	どうぶつのお医者さん	
2010	もようの不思議	冬にそなえて	
2011	骨からみる命　パートⅠ	骨からみる命　パートⅡ	
2012	食べ物からみる命　パートⅠ	食べ物からみる命　パートⅡ	
2013	しっぽの秘密をさぐろう	顔の秘密をさぐろう	
2014	骨のひみつをさぐろう	表皮のひみつをさぐろう	
2015	あしのひみつをさぐろう	耳のひみつをさぐろう	
2016	うんちのひみつをさぐろう	鳥のひみつをさぐろう	
2017	どうぶつのお医者さん	イヌ科のどうぶつのひみつをさぐろう	
2018	大陸シリーズ第1弾　南アメリカ大陸	大陸シリーズ第2弾　アジア	
2019	大陸シリーズ第3弾　アフリカ大陸	ネズミのなかまのひみつをさぐろう	
2020	中止	ウシのなかまのひみつをさぐろう	
2021	どうぶつのお医者さん（中止）	どうぶつのお医者さん	
2022	どうぶつのお医者さん	いろいろな動物の耳のひみつ	

骨からみる命（2011）

2022年の内容紹介

春のテーマは、一番人気の「どうぶつのお医者さん」。

動物園獣医師の１日をＶＴＲで視聴し、動物病院の施設を見学、レントゲン検査や血液検査での異常を見つけてもらいます。また、実際に動物から採血している様子を見ることで獣医師の仕事を実感してもらいます。最後に、参加者に獣医師になってもらい、動物の心拍数、呼吸数、体温などを測る診察体験をしました。

秋のテーマは、「いろいろな動物の耳のひみつ」。

2022年のポスターにバッチリ写っているトラの耳の模様の「なぜ」や、2023年の干支にちなんでウサギの耳のひみつを学びました。また、普段は見ることの出来ないフクロウの耳を間近で観察し、音の聞こえ方についても人間と違う事を学びました。

これまで参加してくれた皆さんは、とても勉強熱心なことが心に残っています。参加者の興味を引き出し、それを更に楽しくさせることも私たちの役目であると思います。これからも動物園は見るだけの場ではなく、学習とワクワクの場でもあることを伝えていけたらと思います。

レントゲンで動物の内部を観察してみよう

フクロウの耳はどんな構造をしているかな?

特集
special feature

大森山動物園「レッサーパンダ」のこれまでとこれから

人気動物のレッサーパンダを大森山動物園で飼育するようになったのは、今から26年前の1997年で、ふれあいランドのオープンに合わせて新たに導入することになりました。今では順調に繁殖していますが、これまでの26年間は苦労もありました。この特集では、歴代担当飼育員がリレー形式で大森山動物園におけるレッサーパンダの歴史と未来について語ります。

レッサーパンダの飼育に初挑戦

1997年～2001年、2016年担当　飼育展示担当　藤原 直樹

健健（ジェンジェン）

1997年2月、大森山動物園で初めてレッサーパンダを飼育するにあたり、福井県の鯖江市西山動物園へ研修に行きました。西山動物園の皆様には、エサ作りや衛生面での注意点、夏の暑さ対策などを丁寧に指導してもらいました。

同年4月26日の「ふれあいランド」のオープンにさきがけ、4月7日に西山動物園からメスの「花」が、翌日に山口県の周南市徳山動物園からオスの「健健（ジェンジェン）」がやってきました。2頭の性格は正反対で、花はマイペースなおっとりやさん、健健はやや神経質な性格でした。獣舎内の環境に慣れさせ、2頭の相性を見極めるため、時間をかけて準備しました。繁殖シーズンを迎えると、健健は積極的に花にアピールするものの、花は素っ気ない態度を示し、残念ながら繁殖にはつながりませんでした。

初めての繁殖に成功

2003年～2006年担当　飼育展示担当　鈴木 昌典

当園では初めてのレッサーパンダの赤ちゃん

2003年からレッサーパンダ担当になりました。前担当者が花と健健による繁殖の道筋を作ってくれましたが、多摩動物公園（東京都）からナナ（メス）が大森山に来てくれたので、高齢の花と健健とのペアリングをあきらめ、ナナとのペアリングに切り替えて繁殖に挑みました。当時は千葉市動物公園の「立つレッサーパンダ風太」が全国的にブレイクし、当園のレッサーパンダも「立つのですか？」との質問を何度も受けたことを思い出します。

そんなレッサーパンダブームの中、当園初の赤ちゃん（双子）が生まれました。ナナは初産でしたが一生懸命子育てをし、私も巣箱を増やし子どもを隠せる場所を作るなどのサポートを行いました。現在、ユキヒョウの赤ちゃんが人気で、展示場にたくさんのお客様が見に来てくださるように、当時のレッサーパンダ舎にもたくさんの人が来てくれました。子育てが落ち着いたナナに「ありがとう」と「お疲れ様」の感謝の気持ちを込め、自分では絶対に買わない高級なバナナをプレゼントしたことを思い出します。

翌年には三つ子も産んでくれ、レッサーパンダ舎は大いににぎわいましたが、同年に健健が亡くなり、大人のオスが不在の状態で次の担当者にバトンを渡すことになったのが、唯一の心残りとなりました。数年しか担当していませんが、動物の生死を経験し、動物飼育を考えさせられた中身の濃い数年間でした。

目に入れても痛くない！？ くらい愛らしい動物

2007年～2015年担当　飼育展示担当　堀籠 麻子

ゆりと陸(右)

前担当者が繁殖に成功し、とても賑やかな環境になった当園のレッサーパンダ。母1頭、仔4頭でバトンを受け取り、他の動物園との搬出搬入を経て、とても入れ替わりの激しい期間を担当しました。当時飼育していた「ナナ(メス)」と「陸(オス)」にそれぞれ繁殖相手をと、他園に掛け合っていた矢先、衝撃的な事実が判明しました。ふと、陸のお股にあるはずのものがないことに気づく飼育員。そうです、陸はオスではなくメスだったのです。そんな出来事もありましたが、ナナと陸の相手に名乗りを上げてくれたのが、立つレッサーパンダとして一世を風靡した千葉市動物公園の「風太(オス)」の長男、「ユウタ」です。「有名なレッサーパンダの子どもが秋田にやって来る！」と当時、期待と不安で胸がはちきれそうになったのを覚えています。ユウタは陸ととても相性がよく、2013年6月に「ゆり(メス)」が生まれました。

ゆりがすくすく育ち一人前になった頃、ユウタは白内障、陸は歩行困難になり、約8か月間の介護を経て陸は永眠しました。2015年3月、長野市茶臼山動物園から「ケンシン(オス)」がゆりのパートナーとして来園し、2頭の交尾を確認してから後任へバトンを渡しました。出産には携われず少し残念でしたが、貴重な経験をさせてもらいました。

(次ページへ続く)

ゆりは2組の双子を出産

2017年～2019年担当　飼育展示担当　関谷 藍子

全国でも珍しい多頭展示

ゆりが初産で、双子の「小百合（メス）」と「ケンタ（オス）」を産んだ翌年の春に、担当を引き継ぎました。双子の育児が落ち着つくと、ゆりとケンシンの2度目のペアリングを開始しました。また、そのペアリング期間中に、高齢のナナ（16歳）が体調を崩し、介護生活も始まりました。介護に応えてくれるように、一時は回復の兆しが見られましたが、最後は静かに息を引き取りました。その直後、ゆりとケンシンの交尾を確認しました。そして2018年7月12日、「かんた（オス）」と「ひなた（オス）」が誕生しました。ナナから命のバトンを受け継いだようで、愛おしさもひとしおでした。2度目の子育てに挑むゆりは、神経質になることもなく、穏やかにたくましく、2頭のやんちゃな双子を育て上げました。一方、小百合は親離れし、兄弟のケンタが他園に移動したことで急に一頭になり、運動量が減ったせいか、ぽっちゃり問題が浮上しました。双子の弟たちとの関係も悪くなかったため、短期間でしたが、全国でも珍しい4頭の多頭展示を行ったこともありました。

3年という短い期間でしたが、飼育員冥利に尽きる濃厚で幸せな日々を送らせてくれたレッサーパンダたちに感謝しています。

快適な暮らしのために

2020年～2021年担当　飼育展示担当　阿比留 優一

台の上でリラックスするユウタ

大森山動物園で働き始めて、最初に担当したのがレッサーパンダでした。当時、6頭のレッサーパンダを飼育しており、その中で最年長がユウタ（当時14歳）でした。老化による健康問題が生じ、運動機能の低下や薄毛症状が見られました。白内障も患っていたため、外で活動する時は、飼育員が付き添う必要がありました。そこで、飼育員がいなくても運動できるように台を作成しました。初めは躊躇していましたが、しばらくすると台に登り、リラックスするようになりました。その他、飼育員と一緒に散歩する回数を増やし、定期的なブラッシングや皮膚の保湿にも注意したところ、1年後には毛並みにボリュームがでてきて、歩調も軽やかになりました。毛並みの改善により、数年前と比較しても若返ったように感じたものです。しかし、主食である笹を選り好みするため、他の個体が食べている葉には見向きもしませんでした。ユウタが好みそうな葉を探すのが日課になりました。

動物を相手にする飼育員の仕事は毎日が勉強です。動物のために何ができるのかを学ばせてくれた2年間でした。

いのちのバトンをつなぐ

2022年～現在（2023年）担当　飼育展示担当　櫻庭 美千代

2022 年11 月に来園した円実

前担当者から6頭のバトンを受け取りました。必死に生きたユウタは2022年5月に永眠し、その後メンバーの大きな入れ替えがありました。かんたは福井県の鯖江市西山動物園に、小百合は札幌市円山動物園に移動しました。そして、小百合と入れ代わりで、円山動物園からメスの「円実（マルミ）」が来園しました。その最中に、肝っ玉母さんのゆりが亡くなり、当園のレッサーパンダは、ケンシン、ひなた、円実の3頭になりました。

臆病な性格のひなたは、いつも先陣を切るかんたが急にいなくなり、外に出る時は恐る恐る辺りを見渡してから、ゆっくり移動していました。そんなひなたも現在は落ち着き、徐々にオスらしさが増してきました。実は、円実もやや臆病なところがあります。ひなたは時々、網越しの円実を見つめに行きますが、円実は少し離れて見ています。しかし、ひなたがその場を後にすると、円実は追うように網に近づきます。今後は繁殖のため、ひなたと円実をペアリングすることになりますが、お互い嫌いではないようです。

臆病な2頭は、この先大丈夫かと不安を感じることがありますが、いのちのバトンを繋いでいくため、しっかりとサポートしていきたいと思います。これからの2頭の成長を温かく見守っていただけると幸いです。

大森山動物園ではこの先も他の動物園と協力しながら、レッサーパンダという種の保存に取り組み、来園者の皆さまが生息地のレッサーパンダに思いを馳せられるような展示や「まんまタイム」などのイベントを頑張っていきます。

飼育レポート

report 01 ユキヒョウ「ヒカリ」の成長記録

飼育展示担当　佐々木 祐紀

ヒカリ（左）とアサヒ

ヒカリが展示場デビューする際に、展示場側面が崖のような作りになっていることや、展示場の中心にあるキャットタワーの一本橋が気がかりでした。ユキヒョウの子どもは身体能力が十分発達していないため、滑って落下する恐れがあるからです。

そこで、地元企業の（株）秋田プライウッド様のご協力により、落下時の衝撃を和らげてくれるウッドチップを展示場に敷き詰めることにしました。

9月7日、ヒカリを初めて展示場に出したところ、しばらく出入口でウッドチップをくわえて遊んでいましたが、1時間後には慣れた様子で展示場に出てきました。母親のアサヒはキャットタワーの上からヒカリを見守ったり、下に降りてヒカリの体を舐めたりと愛情が感じられました。ある日、高所にいるアサヒを見て、自分も岩を登ろうとチャレンジしましたが、滑り落ちて上手くいきませんでした。今度は、落下防止のため、上まで行けないように設置した金網に目を付け、よじ登ろうと何度もチャレンジしました。このまま金網を乗り越えて崖や一本橋まで登ってしまうと、いくらウッドチップを敷いたとはいえ落下が心配でした。翌日、金網を爪がかからない板に交換したところ、何度もチャレンジしましたが、登れないことがわかり、ひとまず諦めました。

ヒカリの展示場デビュー

ヒカリの身体能力が高くなってきた9月下旬、「岩を登りましたよ」とお客様からのお知らせがありました。岩を登る回数が増えてくると、乗り越え防止の板を撤去し、キャットタワー周辺も活動できるようにしました。初めて一本橋を渡ったときは、飼育員もお客様もハラハラしながら見守ったものです。夜間はさらに活発に行動するようになり、展示場を縦横無尽に走り回っています。最近では、アサヒの後を追いかけて走ることもあり、ヒカリの成長に感心しています。今後どのような姿を見せてくれるのか、楽しみでなりません。

report 02 フタコブラクダ「幸」と「福」の同居訓練

飼育展示担当　鈴木 昌典

導入直後の幸（左）と福

当初、2022年3月にオランダから搬入予定だったラクダは、世界的なコロナの影響により、同年8月のアメリカからの搬入に変更になりました。当初予定していたラクダは体の大きい個体だったので、今いる来来（ライライ）（メス）とは同居させず、交互に展示する計画でしたが、体の小さい福（オス）と幸（メス）なら同居ができると思い、3頭を同居する準備を進めました。

まずは、室内で顔合わせをするため、頭が出ないようにフェンスで仕切り、お見合いを始めました。お互いを確認したら、次は外でのお見合いです。外でのお見合い準備は外展示場内をパイプで仕切った区画に来来を入れ、福と幸は、通常の展示場に出す訓練を行いました。福と幸は来来に興味があるのか仕切りの周辺に行き、来来はやや距離を取っているものの同居に向けて悪い感触ではありませんでした。

次のステップはお互いのエサを少しずつ近くすることです。動物のトラブルはエサがらみが大半であることから、ここは慎重に時間をかけ近づけていきました。何日か試した後、大丈夫と判断して同居を開始しました。

何度か来来が2頭に対して威嚇行動を取るものの大きなトラブルはありませんでしたが、2022年暮れあたりから福が幸に対して攻撃するようになり、幸がエサを食べられない状態となったため現在は福を同居から外し、来来と幸の同居を実施しています。当初、順調に進んでいた3頭の同居を断念する結果となり改めて動物飼育の難しさを痛感しました。

春には成長した幸と福の元気な姿を皆さんに見ていただけるよう、2頭を見守っていきたいと思います。

11月の同居訓練の様子

イベントレポート

秋の動物ふれあいフェスティバル（10月2日）

園内9か所に設置したクイズに挑戦する「ウオーククイズ」や、来園者が展示場に隠したリンゴなどを動物が探して食べる「動物のお宅に秋の味覚を隠そう」、ヤギの特別エサやり体験などを、さわやかな秋晴れの中で開催しました。

ウオーククイズ

動物のお宅に秋の味覚を隠そう

大森山動物園自然観察会（10月9日）

大森山にはどんな自然があるのかな？

昆虫をたくさん採集しました

事前に参加申し込みのあった小学生の親子など11名が、飼育員の案内で、園内の天然沼「塩曳潟」の水生生物や大森山公園の昆虫・植物を観察しました。参加者は自然にちなんだクイズやゲームなども楽しみ、最後は拾ったどんぐりをサルへプレゼントするなど充実した時間を過ごしました。

どうぶつサイエンス（10月23日）

自然科学学習館との共催で実施しました。獣医師による動物の病気やケガの診察の話や、体温や心拍数などを測る診察体験、キリンの採血の観察など、普段はできない体験に子どもたちも興味津々の様子でした。詳しくは5ページの記事をご覧ください。

キリンの採血を観察しよう

モルモットの心音、聞こえるかな？

ユキヒョウの命名式（10月23日）

命名式

ヒカリ

22年振りに当園で誕生したユキヒョウの愛称募集を行い、700点を超える応募の中から「ヒカリ」が選ばれました。

命名式には、名付け親である山口美紀様も出席し、愛称の決定をお祝いしました。

いい夫婦の日イベント（11月20日）

今年も「いい夫婦の日」にちなんだイベントを開催しました。夫婦やカップルの皆さんを対象に特別ガイドツアーを行い、飼育員が動物の夫婦のエピソードを披露しました。ツアーの最後にはフラミンゴとの記念撮影会を行いました。

特別ガイドツアー

フラミンゴとの記念撮影

さよなら感謝祭（11月27日）

シーズンの閉園イベントとして、お客さまや動物たちへの感謝を込めて開催しました。セレモニーでは、亡くなったキリンの「カンタ」などに慰霊の献花を捧げたほか、3年ぶりに日新小学校吹奏楽部による演奏を行いました。また、セレモニー終了後、園長と飼育員がこの1年を振り返るトークイベントを開催したほか、カンガルーなど4種類の動物への無料エサやり体験やトナカイとの記念撮影会などを行いました。

感謝祭セレモニー

トークイベント

雪の動物園（1月7日～2月26日の土日祝日）

今年で17回目となる「雪の動物園」を開催しました。お客さまは普段は見ることができない冬の動物たちの様子や、トナカイ・ポニーの園内散歩、カピバラの湯っこなどの冬の風物詩を楽しみました。また、卯年にちなんだ干支展を開催しました。

トナカイの園内散歩

カピバラの湯っこ

今後のイベント（予定）

3月18日（土）～11月30日（木）　2023年通常開園　※期間中無休

9月1日（金）～3日（日）　開園50周年記念イベント＆記念式典

飼育日誌

8/3	ホンドタヌキ	ポコ♀ 採食回復傾向。強制給餌等せずに肉類も食べるようになった。
	アビシニアコロブス	子どもは♂。名前はチョロギ。
8/4		ライオン展示場：お立ち台、爪とぎ用土台木設置作業
	キリン	ケイタ♂ 左腹部～大腿部の痒み箇所に執拗な角当て有りケイタ♂のみ昼前に収容
8/7	シンリンオオカミ	シン♂ 状態が悪化。体が動かなくなった他、血便を複数回確認。
8/13	チンパンジー	ボンタ♂ 夜ZOOによりやや疲れ気味か？
8/16	レッサーパンダ	ゆり♀ 前歯上下2本程抜けている。
8/17	カナダヤマアラシ	繁殖行動。
8/19	ケヅメリクガメ	フミヤ♂ 口から泡を出す。熱中症。
	フタコブラクダ	寝室と寝室の間に顔が出ないようにフェンスを取り付け。展示場馴致訓練
8/26	カリフォルニアアシカ	マヤ♂ 右前鰭の患部、外皮が剥がれてきた。患部に熱感なし。
8/27	ユキヒョウ	仔♀ワクチン接種（3回目）
8/28	ホッキョクオオカミ	ムーン♂ 展示場で小玉スイカを与えてみる。興味を示し、最終的には食べる。
8/29	アフリカゾウ	トリミング時アタック様行動。
9/1	カリフォルニアアシカ	アイラ♀ カンガルー舎で発電機を使う作業していたためか、周りの状況に過敏になっている様子だった。
9/2	チンパンジー	コタロウ♂ ルイが死亡したことによるストレスの影響あり。
9/4	ホッキョクオオカミ	♀2頭の収容に1時間を要する
9/6	キリン	ケイタ♂ リンリンに対して繁殖行動に見える行動あり。
9/7	ユキヒョウ	親子展示訓練開始
9/12	ミニブタ	豚熱ワクチン接種
9/13	トナカイ	ルドルフ♂：枯角となる。作業時要注意。
9/14	ニホンザル	サル山一斉捕獲（個体チェック）、1頭去勢処置
9/18	カリフォルニアアシカ	マヤ♂：口腔内に発疹（点）確認
9/21	フタコブラクダ	同居訓練（2回目）
9/25	ジャンボウサギ	全頭コクシジウム検査、さとみ♀：バリウムを使用したX線胃部検査
9/26	ユキヒョウ	リヒト♂ 前足裏の擦れによる歩行異常あり。
9/28	ユキヒョウ	リヒト♂ 前肢肉球ワセリン塗布及び爪切り。
9/30	フンボルトペンギン	左右赤♂ 夕方から朝まで趾瘤症防止のシューズ装着。
10/3	トナカイ	ルミ♀ 朝角がフェンスに絡まった状態で動けずにいた（午後角を一部切断） 春来♂ 午後角がフェンスに挟まった状態となったが自力脱出
10/12	ユキヒョウ	仔 タワーの最上段に上がり降りるのに時間がかかる。
	ミニチュアホース	エニフ♀ 獣舎裏で散歩訓練実施
10/16		コウノトリ舎ネット張り
10/17	カリフォルニアアシカ	同居開始（13：00～）
10/24	ゼニタナゴ	産卵確認。
10/27	レッサーパンダ	ゆり♀夕方歩行困難、意識混濁、痙攣あり。入院
10/28	アカカンガルー	カスベ♀：採食不良のため夜間隔離管理。
10/29	キリン	ケイタ♂ 舌の裏側が一部切れて剥離（2度目）
11/2		カピバラの湯っこ初日
11/3	ミーアキャット	福井群 7888♀ 前肢の甲シュートに挟め午後診察
11/4		チンパンジー舎：水モートに水中ポンプ設置。（凍結対策）
11/8	トナカイ	ルミ♀を移動ししなの♀と同居させる。
11/10	アフリカゾウ	横臥睡眠ビデオ確認。便回復傾向。
11/14	フラミンゴ	夜間収容開始。
	アフリカタテガミヤマアラシ	♂移動（ウェルカム動物舎→ヤマアラシ舎）
11/16	ベニコンゴウインコ	3卵目の産卵
11/17	レッサーパンダ	円実展示訓練
11/19	トナカイ	春来♂ 両角落角
11/20		イヌワシ（第1ペア用）巣材採取及び消毒作業。
11/21	レッサーパンダ	円実♀ ガラス展示場で展示訓練
11/22	アフリカゾウ	ランブル音、左肩・左腰何度も叩く。
11/24	ニホンイヌワシ	第1ペア 今季初の巣材を投与。
11/25	トナカイ	ルドルフ♂ 落角完了
11/26	キリン	ケイタ♂ 朝激しい角当て行動あり（ラマ隣室移動の効果は低い）
11/27	アフリカタテガミヤマアラシ	トロワ♀放飼訓練。
11/28		イヌワシ保全棟冬囲い作業
11/29	マーコール	♂♀別居開始。
12/1	フタコブラクダ	朝一、来来♀が幸♀にかなり威嚇行動あり。数分後威嚇終わる。
12/4	トナカイ	春来♂以外の3頭再同居を実施。再度ルドルフ♂の発情行動が見られたため分離。
12/6	キリン	ケイタ♂用 ペレットの自動給餌器設置（首振り対策）
12/9	アフリカタテガミヤマアラシ	新規個体放飼訓練。
12/10	ボアコンストリクター	約1カ月ぶりに採食
12/15	アカカンガルー	ハル♂ 低体温、起立不能で入院。
12/16	ベニコンゴウインコ	5卵目の産卵あり。（巣箱内4個）
12/18	トナカイ	ルドルフ♂ しなの♀への執着が見られた。寒い日に発情行動が強まる傾向。
12/19	プレーリードッグ	新個体同居2回目。
12/19	アカカンガルー	サイチ♂ 右鼻から膿性の鼻汁。抗生剤筋注。
12/20	ジャンボウサギ	けいこ♀ 出産準備に向けた飼育管理、本日で一旦終了。
12/24	ツキノワグマ	今日から室内に藁を入れて冬ごもりを始める。
12/25	アカカンガルー	サイチ♂ 死亡
12/26	トナカイ	春来♂ 新しい袋角が生えてきている。
12/28	ジャンボウサギ	さとし♂×けいこ♀ 繁殖に向けたペアリング実施（1日目）

お客さまの声

8／17	夜の動物園、楽しませていただきました。ありがとうございます。来年も絶対に来ます！！
9／28	園内のBGMがオルゴールなのが良いです。落ち着くし癒されます。
9／28	約1年前、旅行のついでに立ち寄った動物園でしたが、その時すごく楽しくて、また来ようねとなりました。今年5月に年間パスポートを購入し、今月また来ました！大森山動物園に行くために、秋田に来ています。
10／30	12月も開園してほしい。
11／12	子どもと一緒に動物を見て回るのはもちろん、すべり台や季節の散策にも大変お世話になっています。いつも楽しませてもらっています。
11／19	園長さんはじめ、飼育員さん、職員さんが動物たちを大事に思っていることが伝わってくる動物園だと感じています。県外ではありますが、何度も訪問することで応援したいと思います。

かたばた通信

今年は大森山動物園にとって開園50周年の記念の年です。9月の開園記念日を中心にいろいろなイベントなどを開催する予定です。記念のロゴマークの動物たちのように、スタッフ一丸となって未来に向かって進んでいきますので、今後も大森山動物園をよろしくお願いします！ （吉田）

OMORIYAMA ZOO 50th ありがとう50年 ～つながり、ともに未来へ～

発行／秋田市大森山動物園 〒010-1654 秋田市浜田字潟端154番地 TEL 018-828-5508 FAX 018-828-5509 E-mail ro-inzo@city.akita.lg.jp デザイン・印刷／秋田協同印刷株式会社

●動物取扱業者／秋田市長 穂積 志 ●事業所及び所在地／秋田市大森山動物園 秋田市浜田字潟端154番地
●登録に係る動物取扱業の種別／販売：動-3-41 貸出し：動-3-42 展示：動-3-43
●登録の年月日／2007年6月1日 ●有効期間の末日／2027年7月31日 ●動物取扱責任者／山上 昇 髙橋 拓

大森山動物園 検索
ホームページ http://www.city.akita.lg.jp/zoo/index.html